

大阪府感染症情報センターでは国立感染症研究所が配信している梅毒の国内発生状況分析情報 (<https://www.niid.go.jp/niid/ja/syphilis-m-3/syphilis-idwrs/7816-syphilis-data.html>) を参考に、大阪府内における梅毒症例の動向について四半期毎の推移をまとめたものを 2022 年第 1 四半期より四半期毎に配信させていただいております

## 大阪府内で感染症発生動向調査によって届け出られた梅毒の概要

2023 年 7 月 11 日現在

2022 年第 2 四半期から 2023 年第 2 四半期は、以下の週に該当する

- ・ 2022 年第 2 四半期：第 14 週~26 週 (2022 年 4 月 4 日~2022 年 7 月 3 日)
- ・ 2022 年第 3 四半期：第 27 週~39 週 (2022 年 7 月 4 日~2022 年 10 月 2 日)
- ・ 2022 年第 4 四半期：第 40 週~52 週 (2022 年 10 月 3 日~2023 年 1 月 1 日)
- ・ 2023 年第 1 四半期：第 1 週~13 週 (2023 年 1 月 2 日~2023 年 4 月 2 日)
- ・ 2023 年第 2 四半期：第 14 週~26 週 (2023 年 4 月 3 日~2023 年 7 月 2 日)

注) 2023 年第 26 週(2023 年 7 月 2 日)までに診断されていても 2023 年 7 月 12 日以降に届け出のあった報告は含まない。

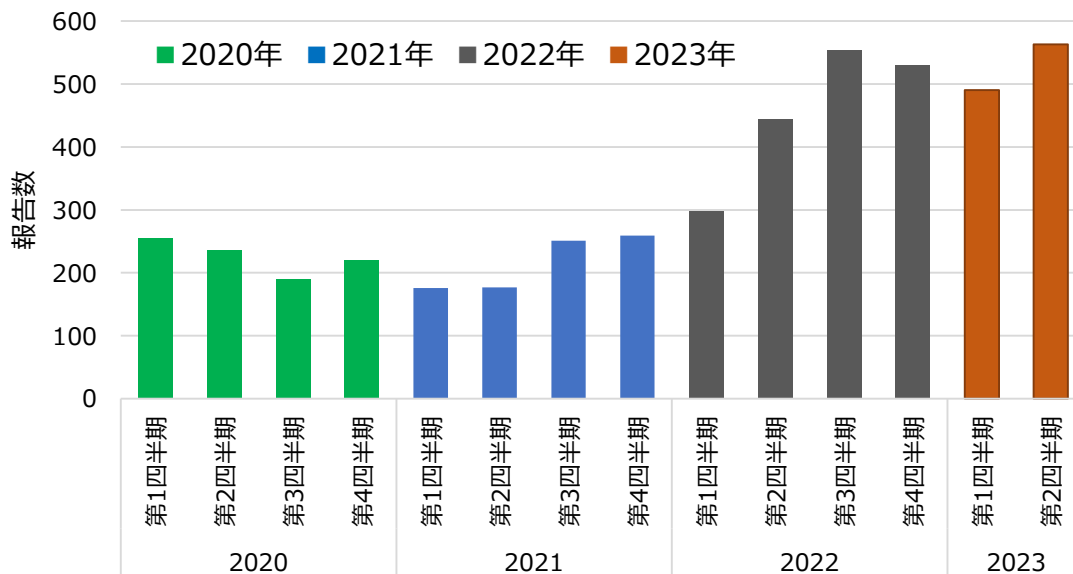
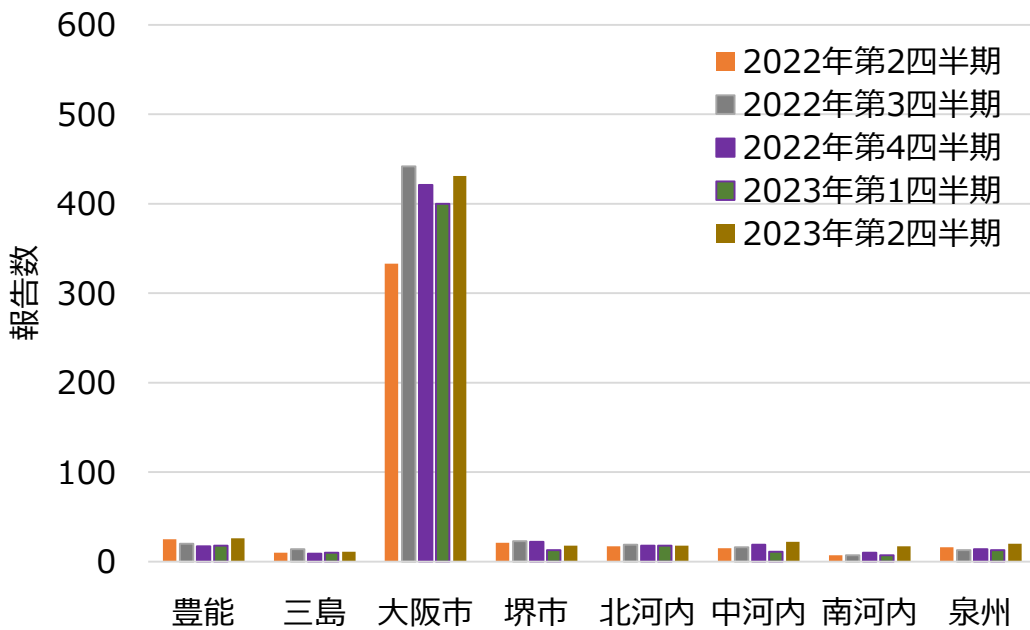


図1 大阪府内における梅毒報告数

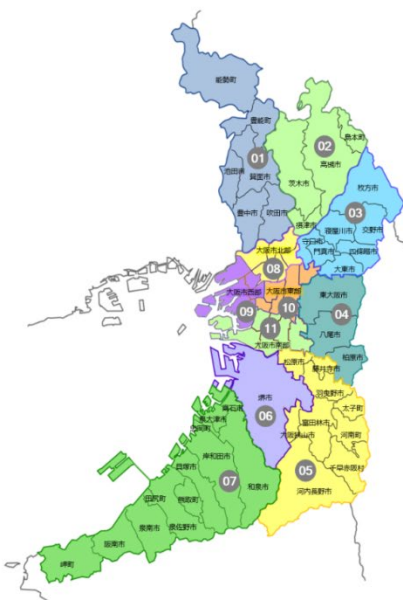
- 2022 年第 4 四半期以降報告数が減少傾向であったが、2023 年第 2 四半期は増加に転じ、現時点で 2022 年第 3 四半期を上回る報告数となっている。 2023 年第 2 四半期は 2023 年第 1 四半期に比較し報告数が 15%増加している。 遅れ報告があることから、特に直近の報告数は今後変動する可能性がある。

図2 ブロック別報告数



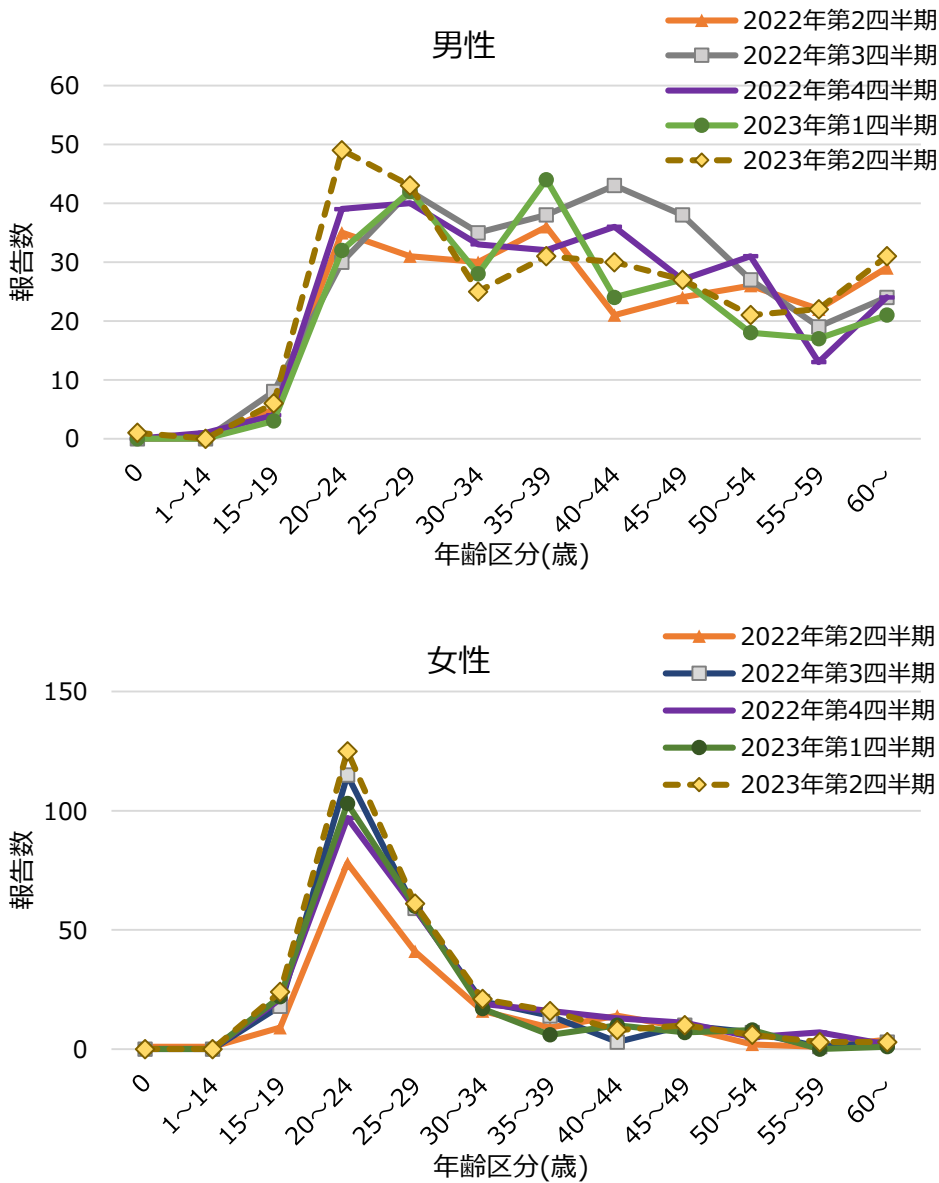
- 四半期毎の報告数は全ての期間において大阪市医療圏で最も多い。また、2023年第2四半期は北河内ブロックを除く7ブロックで、2023年第1四半期と比較し報告数が増加している。

【参考】 感染症発生動向調査ブロック分け (<http://www.iph.pref.osaka.jp/infection/block1.html>)



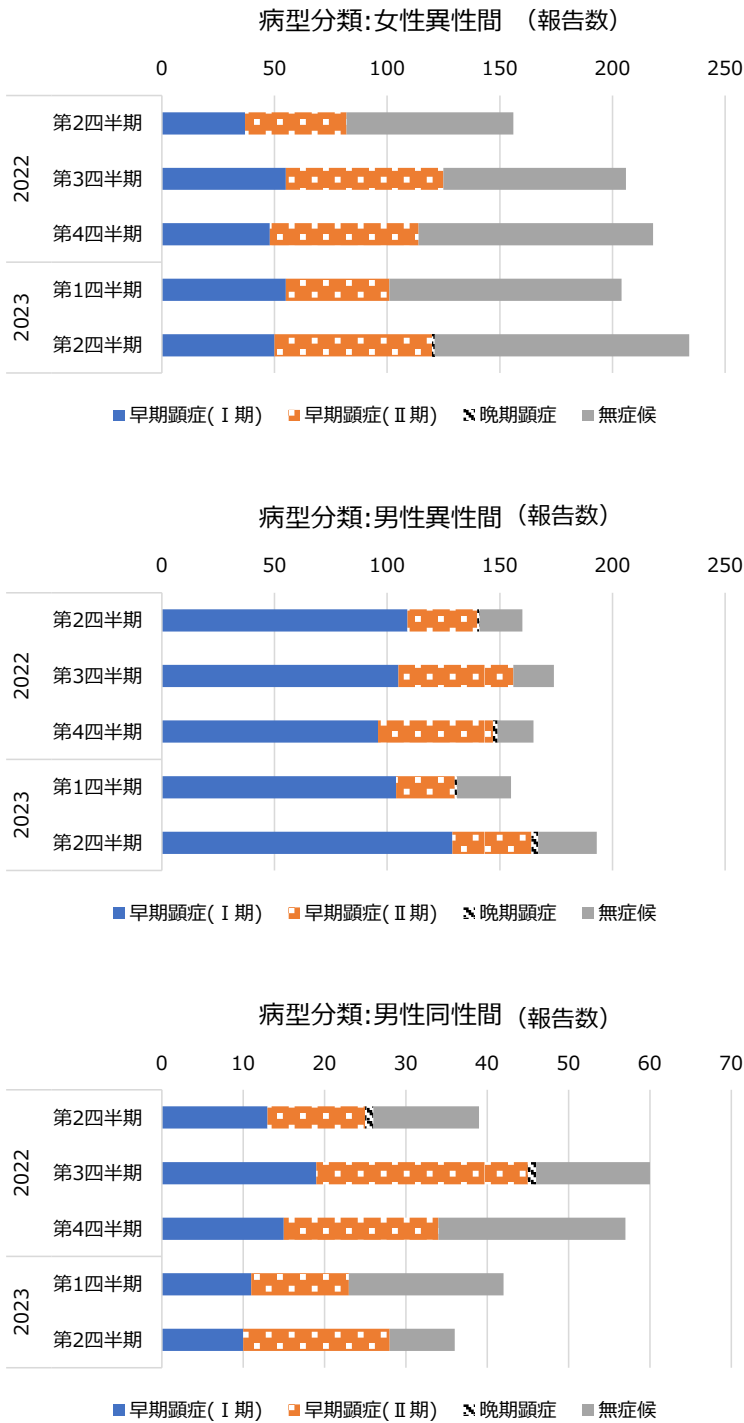
ブロック	市町村区分：所管区域	所管保健所	
01 豊能	豊中市	豊中市保健所	
	池田市、箕面市、能勢町、豊能町	池田保健所	
	吹田市	吹田市保健所	
02 三島	高槻市	高槻市保健所	
	茨木市、摂津市、島本町	茨木保健所	
03 北河内	枚方市	枚方市保健所	
	寝屋川市	寝屋川市保健所	
	守口市、門真市	守口保健所	
	四條畷市、大東市、交野市	四條畷保健所	
04 中河内	東大阪市	東大阪市保健所	
	八尾市	八尾市保健所	
	柏原市	藤井寺保健所	
05 南河内	藤井寺市、松原市、羽曳野市	藤井寺保健所	
	富田林市、大阪狭山市、河内長野市、河南町、太子町、千早赤阪村	富田林保健所	
06 堺市	堺市	堺市保健所	
07 泉州	和泉市、高石市、泉大津市、忠岡町	和泉保健所	
	岸和田市、貝塚市	岸和田保健所	
08 大阪市 北部	北区、都島区、淀川区、東淀川区、旭区	大阪市保健所	
	09 大阪市 西部		福島区、此花区、西区、港区、大正区、西淀川区
	10 大阪市 東部		中央区、天王寺区、浪速区、東成区、生野区、城東区、鶴見区
	11 大阪市 南部		阿倍野区、住吉区、住之江区、東住吉区、平野区、西成区

図3 性別年齢分布



- 2023年第2四半期は、男性では最も報告数が多い年齢区分は20～24歳で、次いで25～29歳が多かった。20歳代～40歳代で、男性全体の72%を占めた。
- 2023年第2四半期は、女性では2023年第1四半期に引き続き20～24歳で最も多く、次いで25～29歳が多かった。20歳代の割合は女性全体の67%を占めた。また10歳代の割合は女性全体の9%を占めている。
- 全期間を通じ20～40歳代の男性および20歳代の女性で特に報告数が多いことから、妊娠の可能性のある者のうち感染リスクがある者や、妊娠中、または、妊娠の可能性のある者のパートナーに対する、必要に応じた積極的な検査実施と啓発が重要であると考えられた。
- 2023年第2四半期は特に20歳代および、60歳以上の男性で増加を示しており、今後も注視していく必要がある。
- 男女ともに20歳代の報告数が多いことから、10歳代の若者が性感染症に関する知識を得る予防啓発の機会を増やすことが重要な対策の一つになると考えられた。

図4 性的接触歴別、病型の内訳



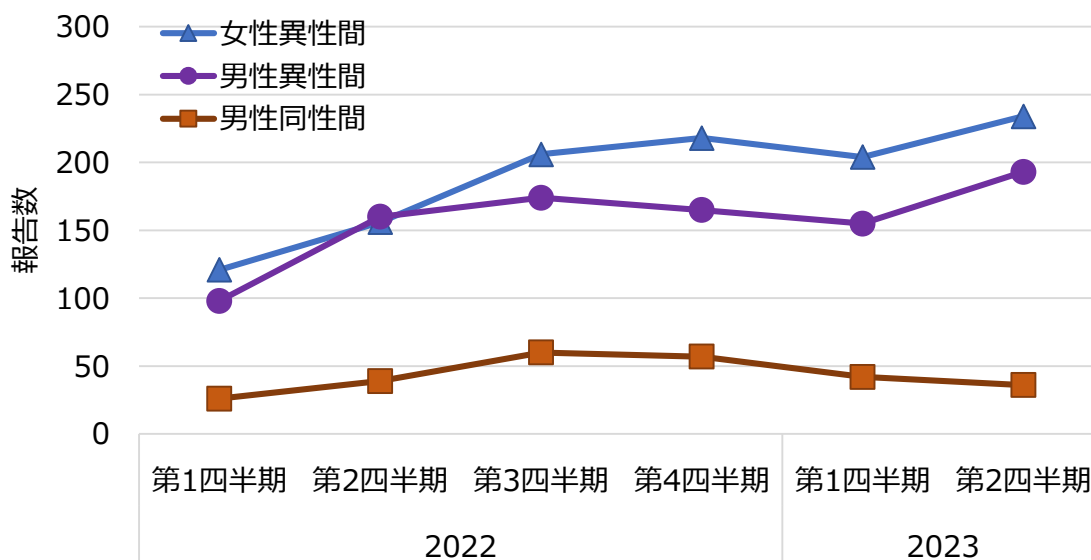
- 2023年第2四半期は無症候での届出の占める割合が女性異性間で48%、男性異性間で13%、男性同性間で22%と、2023年第1四半期と比較しそれぞれ2%減少、2%減少、23%減少といずれも減少した。
- 全期間を通じて女性異性間は無症候での届出の割合が高く、一方で男性異性間は無症候での届出の割合が低い。女性は自発的検査あるいは医師の検査勧奨や妊婦健診など、検診目的の検査で感染が

判明している可能性が考えられ、男性は、梅毒の症状を自認した患者の受診によつての診断が大部分を占め、自発的な検診による無症候性梅毒の検出・診断が少なくなっているものと考えられた。

- 男性同性間は男性異性間と比較し無症候で届出される割合が高いことから、受検意識の高さや検診目的の検査による判明が多い可能性がある。しかし、2023年第1四半期と比較して、男性同性間の無症候での届出の占める割合が23%減少していることから、男性で同性間性的接触歴のある者の受検意識や、検査機会が十分でなくなつてきている可能性があり、その結果見かけ上男性同性間の報告数が減少している可能性も考えられた。
- 梅毒の流行を抑えるには、予防啓発はもちろんのことだが、それに加えて自発的な梅毒検査受検率のさらなる向上が必要である。特に感染の可能性の高い、頻繁に異性間性的接触を行う男性へ、働きながらも受検しやすい梅毒検査環境を提供するなど、積極的な受検を促し、無症候の感染者の診断と治療による介入を行うことが重要であると考えられた。

注) 男性同性間・異性間両方に記載のある症例は重複して含めている

図5 性的接触歴別報告数推移



- 2023年第2四半期と同年第1四半期を比較すると、女性の異性間性的接触歴のある報告数は15%増加、男性の異性間性的接触歴のある報告数は25%増加、同性間性的接触歴のある報告例は14%減少し、特に男性の異性間性的接触歴のある報告数が増加した。

注) 男性同性間・異性間両方に記載のある症例は重複して含めている

表1 直近6か月以内の性別性風俗産業の従事歴および利用歴

男性		2022年第2四半期	2022年第3四半期	2022年第4四半期	2023年第1四半期	2023年第2四半期
従事歴	あり	8 3%	9 3%	8 3%	5 2%	9 3%
	なし	162 63%	173 57%	167 60%	168 66%	177 62%
	不明	72 28%	93 31%	70 25%	56 22%	75 26%
	空欄	17 7%	29 10%	35 13%	27 11%	25 9%
	計	259	304	280	256	286
男性		2022年第2四半期	2022年第3四半期	2022年第4四半期	2023年第1四半期	2023年第2四半期
利用歴	あり	86 33%	88 29%	90 32%	85 33%	92 32%
	なし	83 32%	102 34%	102 36%	91 36%	98 34%
	不明	73 28%	89 29%	62 22%	58 23%	71 25%
	空欄	17 7%	25 8%	27 10%	22 9%	25 9%
	計	259	304	281	256	286

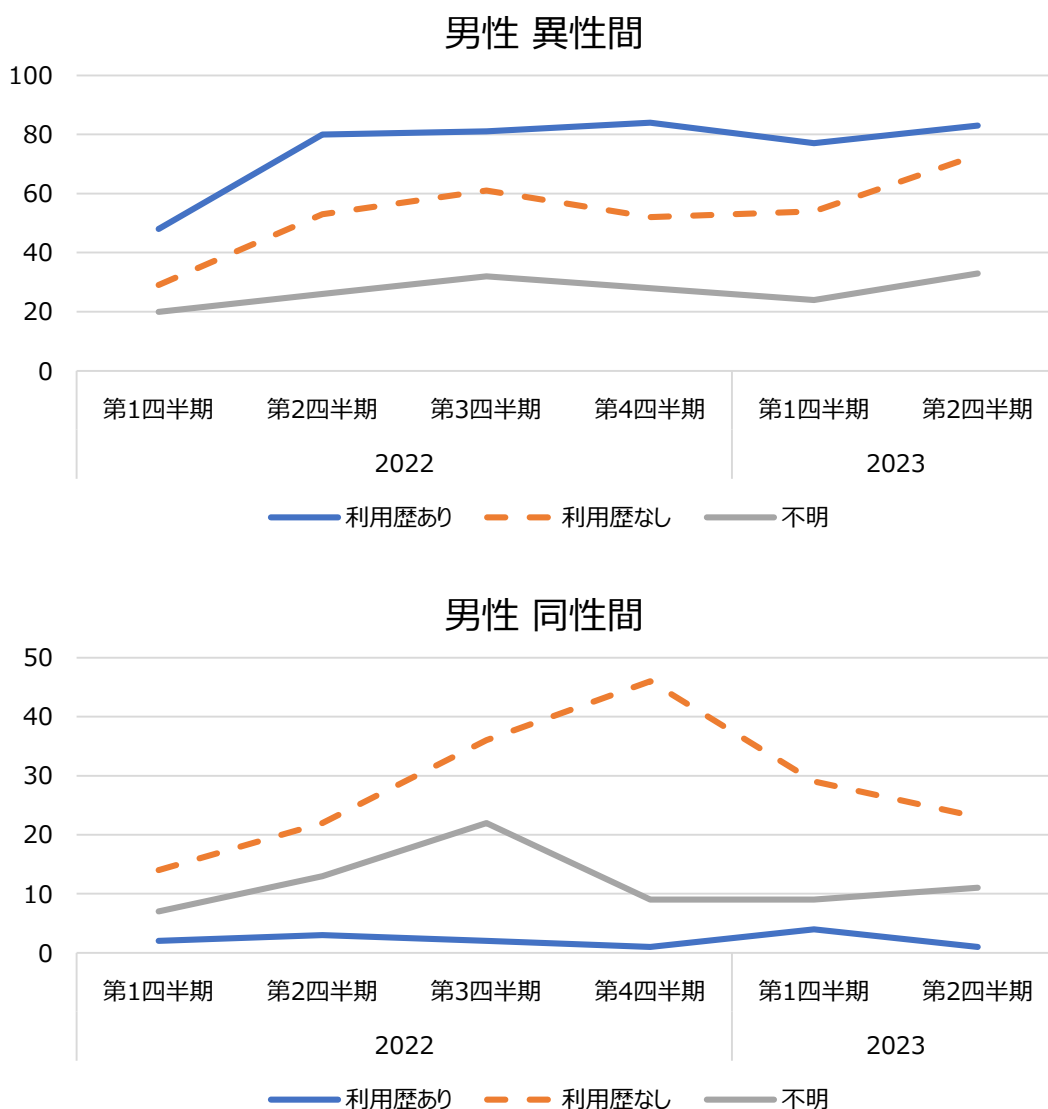
女性		2022年第2四半期	2022年第3四半期	2022年第4四半期	2023年第1四半期	2023年第2四半期
従事歴	あり	93 50%	138 55%	141 56%	136 58%	156 56%
	なし	29 16%	36 14%	42 17%	39 17%	51 18%
	不明	42 23%	53 21%	49 20%	44 19%	52 19%
	空欄	21 11%	23 9%	18 7%	15 6%	18 6%
	計	185	250	250	234	277
女性		2022年第2四半期	2022年第3四半期	2022年第4四半期	2023年第1四半期	2023年第1四半期
利用歴	あり	7 4%	4 2%	3 1%	0 0%	3 1%
	なし	57 31%	67 27%	91 36%	87 37%	130 47%
	不明	99 54%	152 61%	136 54%	132 56%	124 45%
	空欄	22 12%	27 11%	20 8%	15 6%	20 7%
	計	185	250	250	234	277

\* 空欄：あり、なし、不明いずれにも記載がない場合

割合(%)は小数点第一位を四捨五入して記載

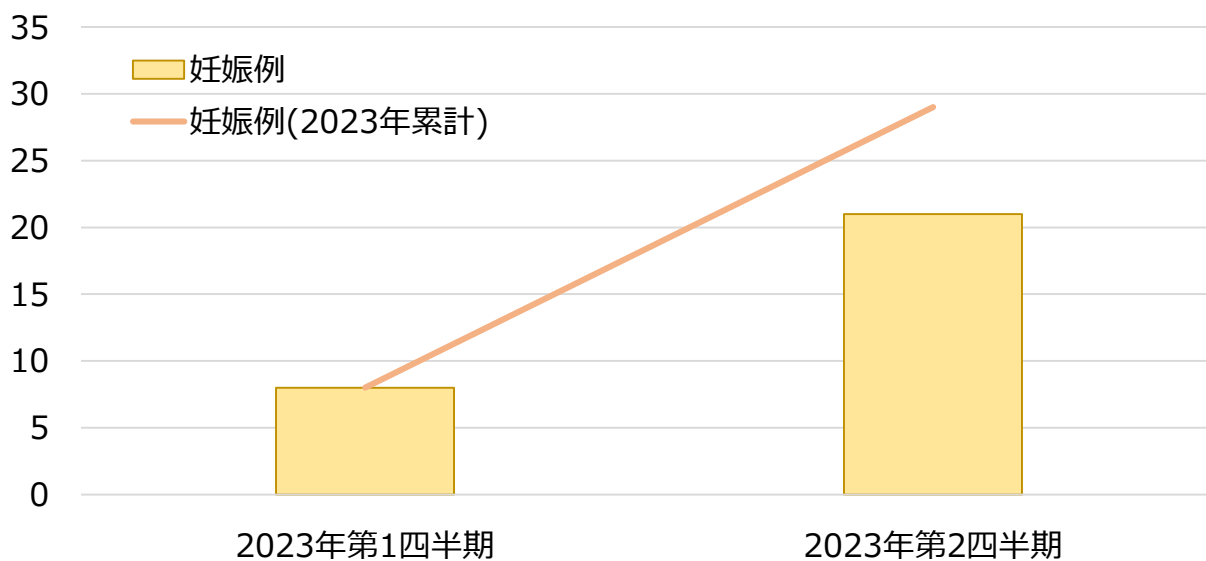
- 男性のうち性風俗産業利用歴のある報告例は30%前後(29~33%)で推移している。
- 女性のうち性風俗産業従事歴のある報告例が50%台(50~58%)で推移している。
- 男性のうち性風俗産業利用歴が不明の報告例が20%台で推移している。梅毒に対し有効な対策を講ずるうえで、精度の高い疫学情報が不可欠であり、届出時の不明記載の割合を少しでも下げていくことが重要であると考えます。

図6 男性における性的接触歴別、性風俗産業の利用歴別の報告数推移



- 男性で異性間性的接触歴のある報告例のうち、利用歴なし、および利用歴不明の報告数が2023年第1四半期に比較し3割以上増加した。
- 男性で同性間性的接触歴のある報告例のうち、性風俗産業利用歴が不明の者が2023年第1四半期から増加し、一方で利用歴のないもの、および利用歴のあるものの報告数は減少している。

図7 妊娠例の報告状況



- 2023年第2四半期に報告された妊娠例は21例で、2023年の妊娠例累計は29例となっている。2022年に報告された年間の妊娠例は41例で、そのうち第26週までに診断されたのは23例であったことから、2023年は前年を上回るペースで妊娠例が報告されている。

#### 参考

大阪府感染症情報センター

大阪府内で報告された梅毒届出症例における妊娠例と先天梅毒の報告状況

(2017年～2022年)

<http://www.iph.pref.osaka.jp/zensu/20220623152435.html>